

令和6年度 練馬区立光が丘むらさき幼稚園 学校評価報告書

練馬区立光が丘むらさき幼稚園
園 長 篠 原 直 子

1 自己評価結果

(1) 概要

今年度は、感染拡大による制限が解かれ、数年ぶりに幼児期にふさわしい直接的な体験を重ね、本園の特色である「人とのかわり」に重点を置いた「共に育つ・共に育む」教育を推進する年となった。

本園の教育活動についてのアンケートでは、保護者からは10項目中7項目において、回答者全員が「概ね達成している」とする高評価をいただいた。教育目標の達成については、「自然や動植物、様々なできごとに出合い、豊かな体験を重ねている」について、90%の保護者がA「あてはまる」を選んでいる。また、特色ある教育について「一人一人の興味や関心に応じて、園内の環境が工夫されている」「自然の変化に目を向け様々なことを感じられるような園庭の環境が充実している」、教職員についての「教職員は笑顔で明るく接している」の項目においても、90%以上の保護者からA評価をいただいた。

自由記述では、本園の教育が一人一人の幼児を温かく肯定的に受け止め、共に育ち合う関係を育んでいること、それぞれの興味関心に応じた遊びを通して様々な学びを重ねていること、教職員と保護者が連携し、共に育む教育が行われていることを高く評価していただいた。

教職員の自己評価においては、7項目中4項目で、全員が「概ねできた」と評価しており、教育活動における「互いを受け入れ合う温かい関係作り」や、園運営における「安全安心な幼稚園作りのための配慮や情報共有」について、特に高評価であった。また年間を通して、教員の評価が同程度からやや高評価に推移しており、教員が日々の実践について努力し、よりよくなったと成果を実感していることが分かる。

【成果】

- ・教育課題研究推進園として、「多様性を尊重し一人一人が輝く幼稚園を目指して～共に育つ・共に育む教育課程の編成を考える～」をテーマに、大学教授や専門機関等の講師を招聘し研究を進めている。また東京都の新規採用研修や区の幼児教育研修会における公開保育も実施し、参観者と共に学びを深めた。これらの取組により、教職員が共に学び合う関係が醸成され、資質向上につながっている。
- ・環境構成や援助の工夫については、それぞれの教員が互いの経験や得意分野を活かし合い、連携を深めることを目指した。特に今年度の5歳児は、入園当初は在籍数が少なく学年で合同保育を行っていたこと、転入児が多く、進級時に担任が変わったことなどから、幼児の実態に応じて保育室の使い方を変化させ環境構成を工夫してきた。引き続き教員間で対話を重ね、柔軟に環境を再構成しながら、よりよい教育活動を展開したい。
- ・保護者への発信については、昨年度に引き続き、管理職を中心に「ヤアヤアグングン通信」と称し、日々の幼児の姿や経験している学びについてA3版掲示物を発行してきた。今年度は、学校連絡アプリでも配信したことで、保護者から好評を得た。また、園長が学期ごとに行っている子育てトークでは、写真を使ったスライドショーを行い、遊びの中の学びについて具体的に伝えるようにしている。
- ・地域の子育て支援に関しては、毎月2回の未就園児の会に加え、未就園児親子向けに週2回保育室開放を行っている。次年度の入園希望者を中心に、少数ではあるが継続して利用がある。また今年度は、保育課による保育園待機児対策として空き保育室を利用した1年保育2歳児保育が実施されている。常時1～2名の在籍ではあるが、日々の教育活動や行事などでは交流を図り、職員間の連携も図っている。

【課題】

- ・施設や園庭環境の安全管理および怪我などの情報については、連絡に不備があり心配をおかけしたケースもあった。引き続き園内で密に連携をとり、情報を共有し、家庭に丁寧に伝える必要がある。
- ・在園児保護者からの評価は高いものの、次年度の入園希望者は減少している。さらに地域の子育て支援に尽力すると共に、本園の教育についての発信を工夫する必要がある。
- ・現在在籍の幼児は、コロナ禍に乳児期を過ごしており、幼少期に人との関わりや直接体験が少ない年代である。そのため、水や泥など感触を楽しむ環境を多く設定し、繰り返し体験する機会を保障してきた。警戒心が強かったり、思うようにならない場面で挫けたりする姿が多く見られるため、様々な感情体験を積み重ねていく必要がある。

【改善策】

- ・安全面の配慮については、学期ごとに危機管理マニュアルの読み合わせやヒヤリハット事例の共有を行うなど、会計年度任用職員を含めた園全体でさらに情報共有を図る。
- ・家庭や地域と共に育む教育をさらに推進するために、関係諸機関との連携を深める。幼児が地域に出ていく機会をつくと共に、学校支援コーディネーターと連携し、地域の人材を活用する機会を工夫する。
- ・地域の児童館や区民センターなどの乳幼児対象の事業に出向き、積極的に本園の教育の内容を発信する。

(2)根拠となる資料

教育活動アンケート集計結果報告(表 1)

自己評価総括表(表 2)

教育活動アンケート集計結果報告

表1

●保護者のアンケート結果より 保護者回答数 60/在籍数 65 回答率 92.3%

A:あてはまる B:まああてはまる C:あまりあてはまらない D:あてはまらない (小数点1桁以下四捨五入)

1 教育目標の達成に向けて (園児全体について回答)

質 問 事 項		保護者				教職員(含:会計年度任用職員)			
		A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	A(%)	B(%)	C(%)	D(%)
1	本園の園児は、遊びや生活に主体的に取り組み、園生活を楽しんでいると思いますか	82	18	—	—	86	14	—	—
2	本園の園児は、園生活の中で、自然や動植物、様々なできごとに出会い、豊かな体験を重ねていると思いますか	90	10	—	—	82	18	—	—
3	本園の園児は、先生や友達に親しみを感じ、かかわりを楽しんでいると思いますか	82	17	1	—	90	10	—	—

2 特色ある教育(夢中になって遊びに取り組む教育・人とのふれあいを大切にする教育)について

質 問 事 項		A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	A(%)	B(%)	C(%)	D(%)
4	幼稚園では、一人一人の幼児の興味や関心に応じて、園内の環境を工夫したり、様々な体験を重ねられるような工夫がされていましたか	90	10	—	—	86	14	—	—
5	園生活では、様々な人とかかわり、親しみを感じる機会が充実していましたか	87	13	—	—	79	21	—	—
6	園生活は自然の変化に目を向け、様々なことを感じ取れるような環境や活動が充実していましたか	92	8	—	—	96	4	—	—

3 幼稚園と保護者、地域との連携について

質 問 事 項		A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	A(%)	B(%)	C(%)	D(%)
7	園だより、ヤアヤアグングン通信などの配信や掲示物、子育てトークや保護者会などを通じて、教育方針や教育活動・内容は、伝わりましたか	85	15	—	—	90	10	—	—
8	保育参加・保育参観・各行事などを通じて園生活の様子や子どもたちの成長を感じることができましたか	85	12	3	—	64	36	—	—
9	避難訓練や安全指導の実施、施設や遊具などの安全管理を行い、怪我などの対応や報告は適切でしたか	83	17	—	—	90	10	—	—

4 教職員について

質 問 事 項		A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	A(%)	B(%)	C(%)	D(%)
10	教職員は、笑顔で明るく接し、家庭と連携して子どもたちを育もうとしていますか	90	8	2	—	96	4	—	—

教員自己評価総括表

表2

・年間を通して、自己評価得点は、同程度からやや高得点(四角枠)になっており、教員が日々の実践について、よりよくなっていると捉えていることが分かる。

【評価16～4点】A(十分にできた)4点 B(比較的できた)3点 C(あまりできなかった)2点 D(できなかった)1点

項目	内容	評 価			
		A	B	C	D
教育活動（自由記述）：成果●課題	1. 一人一人の幼児の特性、友達関係や集団の育ちなどを肯定的に捉えるために、日々の記録や教職員間での情報交換などによる振り返りを行いましたか	1→3	3→0	0→1	—
		13→14			
	2. 様々な直接体験を重ね、豊かな遊びを生み出す環境・教材の工夫を行いましたか	1→1	3→3	—	—
		13→13			
	3. 一人一人の幼児は、自分を受け入れられている安心感を基盤に、互いの存在を受け入れ合う温かな関係を育むよう援助を行いましたか	2→2	2→2	—	—
		14→14			
	○肯定的なまなざしで日々保育にあたった。記録は後半、園内研につながることも意識しながら工夫して取り組んだ。 ○幼児の姿や楽しんでいることをもとに、日々の記録を作成した。また、担任間で情報交換をしながら幼児の実態を理解してきた。 ○担任たちが悩んだり、迷ったりするときに管理職の先生が助言、フォローし、支えてくれる関係がつくられているからこそ、担任も安心して保育ができています。そして、自分の保育を振り返ることができている。 ○子どもの実態を捉えながら、興味を活かす+思いと遊びをつなげる+遊びの刺激(エッセンス)を取り入れることを意識し実践した。 ●自分の学級だけでなく、それぞれが園全体として見る目をもてるとさらに良い。自分が年長だったら？年少だったら？と考えられるとより深まっていく。 ●記録に関しては2学期後半に滞ることが多かった。 ○後半になって、担任間はより連携をとって保育ができるようになったと思う。 ○情報交換を行うことで日々の保育の援助に活かすことができている。また、様々な職員の話聞くことで、育ちの見方、考え方、とらえ方など勉強になっている。 ○幼児の直接体験が好きな遊びにつながるよう意識した。 ●豊かな遊びが生まれるよう、より実態に合った教材研究を深めたい。 ●日々の業務に追われ、教材研究が後回しになってしまい、取り入れてみたいと思ったことでも結局できずに終わってしまっている。 ○季節の移り変わりを肌で感じられるような戸外での遊び(虫取り、虫や植物の観察、興味を広げたり深めたりする収穫物を絵にしてイメージを広げお話し作りなど)の展開をすることができた。 ○一人一人との関係づくり、保護者との対話を基盤に試行錯誤してきた。それぞれが安定して過ごし、互いの持ち味を受け入れる土台ができています。 ○一人一人が安心できるよう、丁寧に信頼関係を築けるよう関わってきた。 ●それぞれの幼児の実態に応じて、安心して過ごせる環境や居場所づくりができるようさらに努力したい。 ○一人一人のありのままの姿を受け入れることを意識して援助を重ねていくことで、幼児同士も互いに受け入れ合う温かな関係性ができてきていると感じている。 ○完全ではないが、多様な個性をもつ幼児たちが、毎日一緒にいて安心する場にはなってきた。一人一人が自分で楽しいと思える環境作りができてきた。				

【教育活動に関して】

・一人一人の幼児を肯定的に捉え、日々の教育活動を振り返ることを丁寧に行っており、それを評価する記述が多く見られる。また職員間で対話し、さらに多角的な視点で実践を振り返ろうとしており、学び合う関係が醸成されている。

・半面、日々の業務に追われ教材研究や記録の作成が滞ることがあるとの記述もあるので、業務の精選や優先順位を共有する必要がある。

・一人一人の幼児が受け入れられ、それが互いを認め合う温かな関係につながるように、園全体で努力してきた。多様性を尊重しつつ、互いが受け入れ合えるように、さらに教職員同士、家庭や地域とも連携を深めたい

項目	内容	A	B	C	D
園運営 (自由記述：○成果 ●課題)	1. 自身の課題に向かって学ぶ姿勢をもち、それを互いに共有し学び合おうとしたか	—	3→4	1→0	—
		11→12			
	2. 自身の園務分掌に責任をもって取り組み、教育活動の充実や業務改善につながる提案や実施を工夫しましたか	0→2	4→2	—	—
		12→14			
	3. 安全・安心な幼稚園作りのため、日々の安全面の配慮およびヒヤリハットの情報共有や改善に向けての連携を行いましたか	2→2	2→2	—	—
	14→14				
	○課題に向かって学んでいたが、それを共有して還元するまでには至らなかったところがある。 ●共有できるためには、時間の確保が必要。時間がないのではなく、時間は自分でつくる。 ○区幼教などを通して幼児理解や環境・教材の工夫など学ぶことができた。 ●研修や他の教員から学んだことを保育に活かしていけるようさらに意識して取り組む。 ○自分の園務分掌に限らず、提案や改善につながるよう発信し努めることができた。 ○自身の分掌の内容を理解し、適宜他の教員にも相談しながら園務分掌を進めてきた。 ○園務分掌では責任をもち計画通りに進めることができています。業務改善などでは、職員で意見を出し合いより良いものにしようとする動きがあると思われる。 ○ヒヤリハットしたところは職員間で日々情報共有し、改善を考えていくことができた。介助員とも細やかに連携してきた。 ○毎月の安全点検や日々気が付いたことなど教員間で情報共有をしながら環境を見直し改善することができた。 ○定期的な安全点検以外にも、日々の保育の中で、幼児にとって安全であるかどうかは常に意識している。 ●ただ、行事への取り組みが忙しく担任だけでは目が行き届かない場合は、園内の教職員と連携を図り、いつも以上に全体で安全面に配慮していかなければいけないと感じている。 ○担任間や介助員の配置など、室内外で目が届くような動き方をし、注意をしてきた。				

【園運営について】

- ・研修に関しては、それぞれの教員が自身の成果として挙げた記述は少ないが、講師を招聘しての園内研をはじめ特別支援研修会や区内の各研修(担当分掌)、区幼教などで意欲的に学びを深める姿が多く見られている。
- ・園務分掌に関しては、若手教員や臨時任用教員にも具体的に説明や確認をする、疑問に思ったことを質問するなど、お互いが協力し合って取り組もうとする姿勢が見られている。
- ・園内で気付いたこと、特に「ヒヤリハット」のできごとは、すぐに声に出して情報共有できるように心がけた。重大な怪我、事故はなかったことが成果である。

項目	内容	A	B	C	D
子育て支援体制・地域との連携	1. 保護者・地域との連携・協働に向け、本園の教育内容や日々の幼児の育ちについて、具体的な発信を心掛けましたか	1→1	2→3	1→0	—
	①対話と②書面で 発信してきた。 ①日々保護者と対話するささやかな時間の積み重ねを大事にしてきた。 ②行事などはタイムリーにヤアヤアグングン通信で管理職の先生がしてくださっているので、遊びの意味や経験していることは学年通信で伝えることを意識して発信してきた。 ●むらさき幼稚園に限らず、区立は特に自由な幼稚園というイメージが強い。自由だからなんでもいい、と言うわけではなく、その中で確かに大事にしていること、自由の中で育まれている思考力・探究心・遊びの力などを発信できると良い。 ●保護者への連絡では幼児の姿や育ちがより具体的に伝わるよう努めていく。 ●個別に話すことは意識できたが、全体への発信(通信含め)は今学期も少なかった。日々行っている保育の内容が伝わるような発信をしていかなければと感じている。 ○ヤアヤアグングン通信や Sigfy など発信できている。	12→13			

【子育て支援体制について】

- ・担任が日々のできごとを通して、教育内容や幼児の育ちを伝えることと、管理職による通信や子育てトークなどによる発信と、二つの柱で保護者との連携は図ることができた。
- ・地域との連携・協働については、少しずつ取組を工夫しているところである。次年度以降、学校支援コーディネーターの力も借りながら、さらに充実させたい。

2 学校関係者評価

(1)総括

保護者アンケートの回答率が90%を越えており、その評価結果が非常に高い。保護者との信頼関係が構築されており、保護者が安心して我が子を通わせていることがうかがえる。園児が幼稚園を楽しみにしていること、保護者も園の教育方針を理解し協力していることも、アンケート結果や自由記述から読み取れる。一人一人に応じた援助を教職員が一丸となって推進していることが、幼児同士で互いを受け入れ合い、育ち合う姿につながっていると思われる。

【成果】

- ・会計年度任用職員を含む教職員が全員で一人一人の幼児を受け止め、連携をとって教育活動を推進している。
- ・教員が研修等で、しっかりとスキルを上げている。
- ・保護者にとって安心できる場であり、保護者同士が支え合う関係がある。
- ・多様な人との関わりが、周りの幼児にとっても学びになり、育ち合っている。

【課題】

- ・自由意見にも多く記載されているように、2年保育であることや長期休業中の預かり保育がないなど、保護者のニーズに応じきれていない面がある。園児数の減少は、この点の影響が一番大きいのではないかと。
- ・通信で発信している内容が、行事や一斉の活動場面などに偏りがちである。教育活動の具体的な内容、幼児期の特色である遊びの中の豊かな学びについて、もっと具体的に家庭や地域に発信していく必要がある。
- ・保護者サークルや修了生ボランティアなどの保護者同士のつながりや支え合いがとても重要であるが、一方で就労やそれぞれの家庭の多様な状況により、そこに参加できない家庭もいるのではないかと。
- ・地域の高齢者施設との連携など、さまざまな人と触れ合い親しみを感じる機会が少ないので、さらに工夫するとよい。

【改善策】

- ・「ここに幼稚園がある」ということを地域にアピールしていく場や機会がさらに必要である。例えば未就園児親子が「また来たい」と思えるような楽しくて安心できる居場所となるような工夫が必要である。
- ・地域の様々な人とかかわる喜びや親しみを感じられるように、例えば光が丘のサロン活動など高齢者の方の事業と互恵性のある連携がとれるとよい。
- ・在園児の保護者の園への信頼感や満足感を、地域の未就園児親子に届くような発信の工夫が必要である。HPなどをさらに活用していく。
- ・通信などで管理職が園の特色を発信することと同時に、担任が日々の実践の中で、幼児が経験している学びを丁寧に伝えていく内容がある。両方をどのように効果的に発信していくかが重要である。
- ・3年保育や長期休業中の預かり保育など保護者の要望を受け止め、さらに行政にアピールし、しっかりと連携をとる必要がある。

3 評価結果の公表等

- ・3月保護者会で資料を配付し、園長より説明する。
- ・3月中にホームページでの公表を行う。(概要)

4 次年度の学校改善へ向けた園長の見解

(1) 中期経営目標の実現に向けて

令和8年度までの中期経営目標

- ① 豊かな直接体験を通し、生きる力の基礎を育む
- ② 互いに尊重し協力し合う組織づくりと意欲的に学ぶ教員の育成
- ③ 家庭・地域と共に育む園の運営と子育て支援の充実
- ④ 安全・安心で、居心地のよい幼稚園づくりの推進

- ①「豊かな直接体験を通し、生きる力の基礎を育む」については、園内研究で多様性を尊重し共に育ち合うための教育課程や長期の指導計画の見直しを行っている。個々の発達の特性に応じた個別支援の充実と、幼児同士がかかわり合い、多様な個性を受け入れながら、互いを尊重する関係を構築するために必要なことを明らかにする。遊びや生活の中でそれぞれの幼児が経験している内容を丁寧に読み取り、その実態に合わせた教材研究を重ねると共に、直接体験を重ねる中でそれぞれの幼児が自分なりに探求を深められるような環境の工夫を行う。
- ②「互いに尊重し協力し合う組織づくりと意欲的に学ぶ教員の育成」については、園内研究を核に、職層や経験年数などに応じ、各自が自身の課題を明確にし、目標に向かいながら、資質・能力の向上を目指す。会計年度任用職員が多く配置されているため、引き続き、園の教育方針を丁寧に繰り返し伝え、具体的な実践場面で対話を重ねていく必要がある。一人一人の教職員が、自身の役割を認識し、互いを尊重し協力し合う連携体制と組織をつくっていく。
- ③「家庭・地域と共に育む園の運営と子育て支援の充実」では、保育参観や個人面談の機会に加え、園長による子育てトークや個別のトークなど、在園児の保護者への支援は充実することができた。地域の子育て支援の場となるために、さらに未就園児の会や未就園親子向けの保育室開放を充実させると共に、外部の関係諸機関との連携も図りたい。修了児保護者ボランティアや学校支援コーディネーターとの連携をさらに深め、地域にも幼稚園の教育内容を発信していく。
- ④「安全・安心で居心地のよい幼稚園づくりの推進」については、「危機管理マニュアル」などを定期的に確認し、教職員一人一人が、幼児の安全な生活を守るという意識をもち、連携体制を強化する。定期的な避難訓練・安全指導を通して、幼児自身も安全に対する意識をもち、非常時の行動の仕方など必要感をもって取り組めるようにする。保護者や地域には、必要な情報を発信しながら、共に幼児の安全で安心な生活をつくり、支えていけるよう協力をあおぐ。居心地のよい温かい園の雰囲気醸成するために、環境を整備し、自然にあふれる園庭環境や清潔な園舎の保全に努める。